

「中国人殉難者」の遺骨 発掘から、「日中不再戦」 碑文交換まで

○岐阜公園北の日中友好庭園には、「中国人殉難者之碑」と「中日両国人民世代友好下去」の記念碑があります。
○二つの記念碑が建立された背景や歴史を調べてみました。



中国人殉難者之碑

1. 岐阜県内の朝鮮人・中国人・捕虜の使役

戦争中、徴兵によって不足した男子労働力を補うため、多くの朝鮮人・中国人が鉱山や軍需工場・地下工場・基地などで使役させられました。これらの人々の多くは、自分の意思によらない「官斡旋」や「徴用」、さらには強制的な連行によって現場に送

られ働かされた人たちでした。

戦争末期、空襲が激しくなると、愛知県軍需工場を疎開させるため、岐阜県に多くの地下工場が造られました。その跡地が可児市久々利、各務原市鶴沼大安寺、川辺町西栃井などに残っていますが、その建設労働力の多くは連行された朝鮮人や中国人でした。

昭和16年（1941）、陸軍省は米軍機との戦闘に必要な高高度用航空機エンジンの研究実験施設を新設するため、平湯峠から乗鞍畳平までの軍用自動車道路を造りました。その労働者のほとんどは、連行された朝鮮人約200名でした。

昭和18年（1943）5月から翌年の7月には、戦時輸送力の増強と石炭節約を目的として、勾配が急な国鉄東海道線・大垣から関ヶ原間に迂回線13.6kmが突貫工事で新設されました。その労働者の75%（一日約

過労や事故のため39人が死亡したそうです。

このように、強制連行・労働を強いられた人々は「不衛生な環境・激しい労働と暴行・粗末な食料と栄養不足・病氣と栄養失調」などに苦しみ、多くの人が亡くなりました。

そして終戦後の昭和20年（1945）、生き残った中国人労働者たちは各務原の元航空隊兵舎に集められた後、11月以降数回に分けて鉄道で佐世保に送られ、海路帰国したのです。

2. 昭和29年（1954）中国人の遺骨発掘と犠牲者合同慰霊祭

戦後8年以上過ぎた昭和28年（1953）でも、中国などの大陸から未だ日本に帰国していない人（未引揚者）は約1030人程もいました。特に「残留日本人」と言われた人々も多かったようです。

当時の日本は中国と国交がない状態でしたが、昭和28年2月、政府に代わって日本赤十字・日中友好協会・日本平和連絡委員会と中国紅十字会の間で、残留日本人の帰国交渉が始まりました。交渉の中で、中国紅十字会は、戦時中強制的に連行され日本各地で死亡した中国人殉難者の調査・遺骨の返還を要請しました。協議の結果、「中国は残留日本人の帰国を援助し、在日華僑を受け入れる。日本は中国人殉難者の調査と遺骨を送還すること」で合意しました。

こうして、昭和28年3月22日から、

1000人が朝鮮人でした。日本有数の鉛・亜鉛（武器・弾薬の原料としても重要）の産地でもあった神岡鉱山と同鉱山の発電所工事には、1500人程の朝鮮人と連合国軍捕虜（フィリピン・米・英・オランダ・インドネシアの約1200人）が従事させられました。

このように、岐阜県内で戦時中の強制労働に従事した朝鮮人100人以上の「集団地」は、少なくとも26ヶ所、人数は約8500人にのぼりました。

中国人の強制連行・労働については、日中友好庭園の「中国人殉難者之碑」に、「岐阜県においても1689人が高山市、瑞浪市、各務原市、および加茂郡川辺町で従事せられ、73人が殉難されております。」と書かれています。しかし、下の表のように、「連行人数1969人、死亡者122人……」などの記録もあり、正確な数



船山誘導路跡 各務原市須衛

た。北京に着いた一行は1ヶ月余り中国内に滞在し、瀋陽、上海、杭州、広州など各地を訪れました。

その年の暮れ、今度は中国紅十字代表団が遺骨送還のお礼に来日し、岐阜に立ち寄りしました。そして、各務原市内の薬王院で中国人殉難者の慰霊祭に出席。日中経済交流促進懇談会も行われました。

昭和32年の訪中から5年後の昭和37年（1962）山田丈夫を団長とする「第二次県訪中使節団」の訪中が実現しました。

「岐阜の68（旧陸軍歩兵第六八連隊）は上海陸上作戦、南京攻略戦などに参加した。68もおおぜい死傷者を出したが相手はそれ以上だ。戦争だからしょうがないと片付けられるものではない……もう二度と戦争はしないという誓いの碑を中国に建てられないものか……」

（『ナツメの木は生きている』より）
このように考えていた山田団長は、この訪中を機に杭州市に「日中不再戦の碑」を建立することを松尾吾策市長に提案。松尾市長が賛同し、「日中不再戦」と筆をふるいました。

使節団は9月26日に出発。「なぜ平和と友好の碑を建てるのか」が議論されました。

その結果「○岐阜市の各界と松尾吾策市長の提案で、侵略戦争に反対する碑を建てる○侵略戦争は日本の軍国主義者が引き起こし、日中両国民に災いをもたらした。○両国民は友

は今も不明です。

各務原には887人の中国人が行きされ、各務原市芋ヶ瀬、須衛の両所、飛行機を隠すための誘導路や掩体壕の建設に使役させられました。終戦時までに26名が死亡したそうです。

岐阜県内の中国人強制連行殉難者					
所在地	施設・目的	連行人数	死亡	残留	生還
瑞浪市戸狩	川崎航空機地下工場	330人	39人	?人	291人
川辺町	三菱第五製作所地下工場	270人	4人	0人	266人
各務原市須衛	飛行機誘導路、掩体壕	374人	3人	5人	366人
各務原市芋ヶ瀬	飛行機誘導路	513人	23人	3人	487人
高山市北山	横須賀鎮海鈴鹿工廠	202人	3人	3人	196人
不明（八百津）	川崎航空機地下工場	280人	50人	0人	230人
合計		1969人	122人	11人	1836人

【街も村も「戦場」だった・岐阜県の戦争遺跡】より

瑞浪市戸狩の化石山に掘られた地下壕は、高さ・幅とも3.5mほどのトンネルが縦横に張り巡らされ、全長7628mもありました。目的は川崎航空機工場建設でしたが、中国人にはパンを一日三個与えるだけで、

好を続け、アジア・世界の平和を守る」などを両方の碑の裏に刻むことになりました。

日本と中国の友好と平和を誓った2つの石碑は、それぞれ昭和38年（1963）に建立されました。杭州市柳浪聞鶯公園の「日中不再戦」の碑と、岐阜市日中友好庭園の「中日両国人民世代友好下去」の石碑です。



日中友好庭園にて

○この文章は、「岐阜県史」「岐阜市史」「街も村も戦場だった」「ナツメの木は生きている」「岐阜・杭州市友好の歩み」等をもとに、後藤征夫がまとめました。

岐阜市歴史博物館ボランティア

「お話・岐阜の歴史サークル」

代表 後藤 征夫

<http://book.geocities.jp/gifuexisi/rekistop.htm>